







「明日だろう？合唱祭」

夕食後、部屋でピアノの練習をしていると、森宮さんが入ってきた。

「うん」私はヘッドホンを外して、うなずいた。

「もう伴奏は大丈夫？」

「なんとかね。あとは本番緊張しなければいいんだけど」

私が言うと、森宮さんは「よし。俺、歌ってやるよ」と姿勢を正した。

「え？」

「歌あったほうが伴奏練習、しやすいだろ？」

「そうだけど。でも、知ってるの？私たちが歌う歌」

「知ってるよ。まあ、弾いて」

「ひとつの朝って曲だけど」

「ああ。わかってる」

「わかってるって、ひとつの朝だよ」

私は曲名を繰り返しかえした。合唱曲は普段あまり耳にする機会がない。普通に生活をしていて聴くことはまずないはずだ。

①そう不思議に思っている私の横で、

森宮さんは大きく息を吐いて呼吸を整えている。どうやら本気で歌う気らしい。

森宮さんが歌えるかは不明だけど、弾くだけ弾いてみるか。

私はヘッドホンのコードを抜いて音量を下げてから、伴奏を弾き始めた。三連符から始まるピアノ。リズムを崩さないように丁寧な前奏を盛り上げていく。歌いだしにつながる和音を弾くと森宮さんの息を吸う音が聞こえた。

今日の前にひとつの朝まぶしい光の洪水に世界が沈まないうちにさあ箱船の  
のって旅立とう

「ひとつの朝」は出だしから、力強い言葉が重ねられるダイナミックな歌だ。

森宮さんは躊躇なく、大きな声を響かせている。どうせ歌えないだろうと思って  
いたのに、歌声は伴奏を引っ張っていくような勢いがある。歌は盛り上がった直  
後、しっとりとした曲調に変わる。私は指先を柔らかく動かしてピアノを奏でた。

たとえば涙に別れることたとえば勇気と知り合うことたとえば愛を語ること  
ときには孤独と向きあうこと旅立ちの旅立ちの旅立ちはいくつもの出会い

森宮さんは男性パートではなく、主旋律で歌っている。穏やかに、言葉一つ一  
つが流れないようにしっかりと。普段話しているときは気づかなかったけど、森  
宮さんはいい声をしている。低いわけではないのに、浮ついたところのない落ち  
着いた声。どんな言葉も耳にすんなり入ってくる。

はばたけ明日へまだ見ぬ大地へ新しい大地へまだ見ぬ新しい大地へ生きる喜びを生きる喜びを広がる自由を求めて広がる自由を求めて

最後になるに従い、歌も演奏も壮大に深まっていく。今まで重ねてきた歌詞やメロディの力で曲は広がり、解き放たれたように歌が終わる。

最後の三連符を弾き終わり、私が鍵盤から指を離すと、森宮さんは「おお」と感嘆の声を上げた。

「一人で歌っているときは、旅立ってばっかでえらくおおげさな歌だと思ってたけど、ピアノと合わせるといいよな。うっかり羽ばたきそうになってしまいうらい」

「だね。っていうより、**②私、びっくりしたんだけど**」

「何が？」

「何がって。森宮さん歌、すごく上手。しかも、こんなに歌いこなせるなんて。それに、どうしてこの歌知ってるの？」

私が疑問に思ったことを並べると、森宮さんは「いやあ」と照れくさそうに笑った。

「森宮さんも合唱で、ひとつの朝歌ったことあるの？」

「そうじゃないけど」

「だったら、どうして？この歌、聴くことなんてあんまりないと思うけど？」

「その、まあネットで曲を調べて、練習したんだ」

森宮さんはまずいことでも見つかったかのように肩をすくめた。

「へえ……って、どうして？どうして練習を？」

森宮さんは歌詞を見ていなかった。それに、曲調が何度も変わるこの歌を、完全に歌いこなしていた。歌がうまいだけでは歌えない曲だ。

「なんていうか、父親なら娘が合唱祭で歌う曲くらい歌えて当然だろう？」

**③森宮さんはえへへと笑った。**

「まさか。そんな父親いないと思うけど」

「やっぱり、そうだったか。練習しながらうすうす勘付いてはいたけど。……でもこの曲歌っていると、必要以上にやる気が出たよ。通勤電車の中で、広がる自由を求めてってうっかり口ずさんでしまった時は、みんなに白い目で見られたけどな」

「だろうね」

「まあ、やっぱり俺ってどこかずれてるんだよな」

どこかどころか、すぐくずれている。だけど、森宮さんが歌う「ひとつの朝」はとても良かった。

「そうだ、本当は合唱祭が終わってから弾こうと思ってたんだけど、**④森宮さんが高校の合唱祭で歌った曲、歌おうよ**」

私は机の引き出しから楽譜を取り出して、譜面台に立てた。  
「え？」

「森宮さんが高校三年生で歌った歌だよ」

私はそう言うと、前奏を奏でた。ゆったりとした情感があふれるメロディ。「ひとつの朝」の壮大さとは違う、どこか懐かしい響きの曲。

森宮さんは前奏の間、「いったい何？」「え？うそだろう。**⑤なんで知ってるの？**」と言っていたものの、メロディが始まると、ぼそぼそと歌詞をたどるように歌い始めた。

なぜめぐり逢うのかを私たちはなにも知らないいつめぐり逢うのかを私たちはいつも知らないどこにいたの生きてきたの遠い空の下ふたつの物語

通帳を見せられた翌日、森宮さんが通っていた高校に電話をかけた。

結婚式で父に感謝の意を示すため、父が合唱祭で歌った曲をサプライズで歌いたい。だから、曲名を教えてほしいと。二十年前の高校三年生。何組かは知らなかったから、一番賢いクラス、たぶん特進とかだと思う。と言うと、サプライズに感動した先生が調べてくれた。

森宮さんが高校三年生で歌ったのは、中島みゆきの「糸」だった。

楽譜は楽器店ですぐに手に入った。耳にしたことがある優しい旋律。何度か弾くだけで、指先がメロディを覚えてくれた。

縦の糸はあなた横の糸は私織りなす布はいつか誰かの傷をかばうかもしれない  
縦の糸はあなた横の糸は私逢うべき糸に出逢えることを人は仕合わせと呼びます

ただたどしく歌詞を追っていた森宮さんも、すぐにはつきりと歌いだした。耳だけじゃなく、皮膚からも浸透していくような優しい深い歌声。「糸」は結婚式でよく歌われる歌だと楽譜に書いてあった。でも、会うべき人に出会えるのが幸せなのは、夫婦や恋人だけじゃない。この曲を聴くと、**⑥それがよくわかる。**

「父親が合唱祭で歌った曲の伴奏を練習する娘なんて、いないだろう」  
歌い終わると、森宮さんはそう笑った。

そして、私が森宮さんの母校に連絡して曲名を知ったと聞くと、「優子ちゃんって、行動力あるんだ」と驚き、

「二十年前高校三年生で、今結婚しようとしてる娘の父親って……。娘も俺もいくらなんでも結婚早すぎない？⑦俺、とんでもないヤンキーと思われてないだろうか」と慌てふためいた。

「大丈夫だよ。二十年前ならもう森宮さんのこと知ってる先生は残ってないだろうし、電話に出てくれた先生も深いこと考えずにささっと教えてくれたから」「本当？」

「本当だって。でも、森宮さん、合唱嫌いとか言いつつ、ちゃんと歌ってたんだね。すごくうまくて驚きだよ」

私が正直にほめると、森宮さんはうれしそうに笑った。

「まあな。俺、中島みゆき好きだもん。なんか歌いたくなってきた。優子ちゃん、麦の唄弾いてよ。ほら、中島みゆきの新しい曲」

「麦の唄？知らないなあ」

「えー？うそだろう。朝ドラの主題歌になってたのに？」

森宮さんは心底がっかりしたように眉をひそめた。

「私、朝ドラ見てないし」

「じゃあ、中島みゆきの曲、何が弾けるの？」

「聞いたことある曲はあるけど、弾けるほど中島みゆきを知らないし。楽譜があればいいんだけど……」と言って思い出した。

音楽の教科書に「時代」が載っていた。確か、中島みゆきの曲だと書いてあった気がする。

「そうだ、時代なら弾けるはず」

「よし、それ行こう」

私が音楽の教科書を開くと、森宮さんは「あーあーあー」と発声練習を始めた。大いに歌う気だ。

「私、明日合唱祭なんだけどな。ひとつの朝、練習しなくて大丈夫かなあ。だけど、森宮さんはりきってるし」

私が大きな声でつぶやいてみると、森宮さんも、

「俺、明日朝一番で会議なんだけどな。資料目を通しておかなくて大丈夫かなあ。でも、優子ちゃんの練習に付き合わないとな」とこぼした。そして、

「さ、歌おう。こういうときは歌っておけばいいんだって。歌ってそういうものだ」

と言っのけた。

合唱なんて好きじゃないって言っていたくせにと、私はふきだしてしまった。でも、私もまだまだピアノを弾きたかった。ヘッドホンをつけて練習するんじゃない

なく、こんなふうには誰かの歌と一緒に。

「そうかもね。じゃあ、弾くよ」

「よし、来い」

「ちよつと、歌うのに変な掛け声やめてよ」

それから私たちは聞き覚えのある曲をお互いに言い合っては、何度も歌った。ピアノを弾くのは、いつだって楽しい。合唱祭を前にして、私の中の不安はなりをひそめて、ただ胸が高鳴っていた。

問1…①そう不思議に思っていると思いますが、何を不思議に思っているのですか。

問2…②私、びっくりしたんですけどありますが、何に驚いたのですか。

問3…③森宮さんはえへへと笑った。とありますが、なぜ「えへへと笑った」のですか。

問4…④森宮さんが高校の合唱祭で歌った曲とありますが、この曲名を、作者も含めて9文字で本文中から抜き出さない。

問5…⑤なんで知ってるの？とありますが、なぜ知っているのですか。簡潔に答えなさい。

問6…⑥それとありますが、指示語が指している箇所を29文字で抜き出し、その最初の五文字を答えよ。

問7…⑦俺、とんでもないヤンキーと思われてないだろうかとありますが、それはなぜか。

問8…以下の語句の本文中の意味を答えよ。(辞書で調べても良い)

あ…浮ついた

い…心底

う…なりをひそめて

なりをひそめて

心底

浮ついた

問7


問5


問3

問1



ファイル名 : 文書 1  
フォルダー :  
テンプレート : /Users/yukiishibashi/Library/Group  
Containers/UBF8T346G9.Office/User  
Content.localized/Templates.localized/Normal.dotm

表題 :

副題 :

作成者 : Yuki Ishibashi

キーワード :

説明 :

作成日時 : 2022/02/20 8:23:00

変更回数 : 1

最終保存日時 :

最終保存者 :

編集時間 : 42 分

最終印刷日時 : 2022/02/20 9:30:00

最終印刷時のカウント

ページ数 : 8

単語数 : 3,857

文字数 : 160 (約)